

唐時代 (618~907) つづき

655 武照 (則天武后) 皇后となる
 656 皇太子 李忠、武后により廢位され、664年死を賜る (22歳)
 658 褚遂良 愛州で病没
 663 8月 白村江の戦い 唐勝利 百濟滅亡 欧陽通「道因法師碑」 褚遂良「同州聖教序」

664 高宗の第二子李孝死ぬ

668 唐 高句麗を滅ぼし、平壤に安東都護府をおく 高句麗滅亡
 672 「集王聖教序」

674 武后「天后」と名のる 皇帝は「天皇」とよんだ

675 龍門石窟最盛期「奉先寺洞」完成 皇太子李弘 (武后的長男) 急死する (武后が殺害?)
 李弘の弟李賢が皇太子になったが後に武后により廢位され自殺させられた。

676 新羅朝鮮半島統一

677 高宗「李勣碑」

679 欧陽通「泉男生墓誌」

680 武后的三男李顯 (中宗) 皇太子になる

683 高宗没 武照皇太后となる

684 中宗即位 武后により54日間で廢立された 中宗の弟の李旦・睿宗 (玄宗の父) 即位

685 僧の薛懷義白馬寺主となる

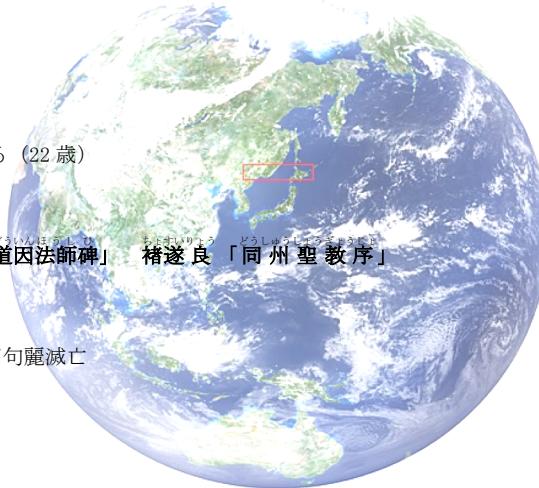
686 密告制度始まる

687 「書譜」 (孫過庭)

690 睿宗廢立される 高宗の三男李上金自殺 四男李素節殺害される 武照帝位につき、国号を周とする (武周)
 武則天 全国に大雲寺を建立 『大雲經』

691 欧陽通没

699 武則天「昇仙太子碑」 薛曜「夏日游石淙詩」 (700) 賀知章「孝經」



659年頃の東アジア



高宗



乾陵



武則天



龙门石窟の奉先寺廬舍那仏



永泰公主墓壁画 (701年頃)

ポロのスティックが見える



高松塚古墳の壁画

(694~710年頃)

正倉院にある「鳥毛立女屏風」部分(752年頃)



樹下美人図
(716年頃・新疆ウイグル
自治区トルファン出土)



- 703 この頃孫過庭没
- 705 武則天中宗に譲位 中宗復位し国号を唐に戻す 暮に武則天亡くなる 薛稷「信行禪師碑」(706)
- 710 皇后韋氏娘の安樂公主と謀り帝位を狙って中宗を毒殺し末子(殤帝)を即位させるが一ヶ月後李旦(睿宗)の息子李隆基(後の玄宗)により韋后と安樂公主は殺害され殤帝は廢位され、睿宗が復位した
- 712 睿宗は李隆基に譲位 玄宗即位 「開元の治」が始まる 『古事記』(日本)
- 714 顏元孫没(『干禄字書』の著者) 張旭「自言帖」
- 717 遣唐使吉備・阿倍仲麻呂入唐 『日本書紀』(720・日本)
- 721 「興福寺断碑」(王羲之の集字碑)
- 726 玄宗「紀泰山銘」
- 730 李邕「麓山寺碑」 李邕「李思訓碑」(739以後) 大伴旅人没(739) 山上憶良没(733)
- 742 安禄山平盧節度使となる 張旭「郎官石碑」(741)
- 745 楊太真貴妃となる 玄宗「石台孝経」 徐浩「崇陽觀碑」(744) 東大寺建立(749)
- 748 楊貴妃一族を登用する
- 750 ウマイヤ王朝倒れアッバース王朝興る イスラム国家の全盛期
- 751 タラス河畔の戦い(唐とイスラム帝国の戦いで唐大敗し製紙技術が西伝する)
- 752 顏真卿「多宝塔碑」
- 754 顏真卿「東方朔画贊碑」 鑑真和上 日本に渡来 「王右軍真跡書一帖」を携行した
- 755 安禄山の乱(安史の乱) 長安占領され、玄宗は四川に避難
- 756 楊貴妃殺される 安禄山、大燕皇帝と称し洛陽、長安を落す 正倉院の始まり
- 757 安禄山殺される 玄宗長安に帰る 顏真卿「祭伯文稿」「祭姪文稿」(758)
- 759 王維没
- 761 史思明殺される
- 762 玄宗没 李白没
- 763 安史の乱終結(中国の人口は10年前の三分の一以下になつたらしい) 顏真卿「争坐位稿」 鑑真没



玄宗



華清池にある楊貴妃像



唐三彩の壺



唐三彩の硯

- 767 季陽冰「李氏三墳記」 徐浩「大証禪師碑」(769)
- 770 杜甫没 764~770 「百万塔陀羅尼經」現存最古の印刷物? 颜真卿「麻姑仙壇記」(771) 弓削道鏡没 (772)
- 774 颜真卿「千祿字書」刻石 張參『五經文字』(776) 狂草の流行
- 777 懷素「自叙帖」
- 780 均田法、租庸調制を廃し、兩稅法を行う 颜真卿「顏勤礼碑」(778)「自書告身」(780)「顏氏家廟碑」(780)
- 781 河北の三鎮、河南の二鎮に反乱起こる 「大秦景教流行中國碑」
- 784 颜真卿没 (785?) 大伴家持没 (785) 最澄延暦寺創建 (788)
- 799 懹素「草書千字文」 平安遷都 (794)
- 804 最澄・空海入唐 空海高野山を開く (816)
- 811 韓愈「石鼓歌」
- 813 唐がウイグル、吐蕃を討つ
- 824 韓愈没
- 833 唐玄度「九經字樣」 杜牧「張好好詩」(834) 空海没 (835)
- 836 この頃印刷術が始まったようだ (民間での暦の印刷販売を禁止している)
- 837 「開成石經」 柳公權「玄秘塔碑」(841) 楊凝式「神仙起居法」 嵯峨天皇・橘逸勢没 (842)
- 845 白楽天没
- 858 李商隱没
- 865 柳公權没
- 868 「金剛般若波羅密經」(敦煌発見刊本で現存最古の印刷書籍 最古の木版画?)
- 875 黄巢の乱 (以後10年にわたり戦火全土に拡大する)
- 880 黄巢の反乱軍長安に入城
- 882 黄巢の部下の朱温、唐に寝返り唐より朱全忠の名を賜わる
- 884 黄巢殺され反乱終結 日本遣唐使廃止 (894) 「古今和歌集」(905)
- 907 朱全忠帝位につき梁を建てる 唐滅亡 これより約50年間、群雄割拠して五代十国の時代が始まる



李白



白乐天



894年頃

歐陽通

(? - 691) 欧陽詢の第4子。父を大歐陽、通を小歐陽という。幼少の時父を失つたので直接父からは教えられなかつたらし。母から父の書法を受けられたと言われている。武則

天の甥の皇太子指名問題で武后に反対したため誅殺された。二つ作品が残つてゐる。

道因法師碑

(663) 楷書体。六朝楷書風(北魏風)。偏平な形、狭い懷、強い起筆、隸書風の收筆などが特徴。

写經体風。道因法師の頌徳碑。西安碑林に現存。



泉男生墓誌銘

(679) 小楷。欧陽詢の書風に近い。泉男生の頌徳碑。河南省博物館蔵。



高宗 (こうそう) (628 - 683) 唐の第3代皇帝。太宗の第9子。諱は李治。病弱で内向的。武后より5歳年下で、妾信的に

武后を寵愛した。

李勣碑

(677) 行書 高宗の撰文 王義之風 高さ6・65mもある巨大碑



集王聖教序

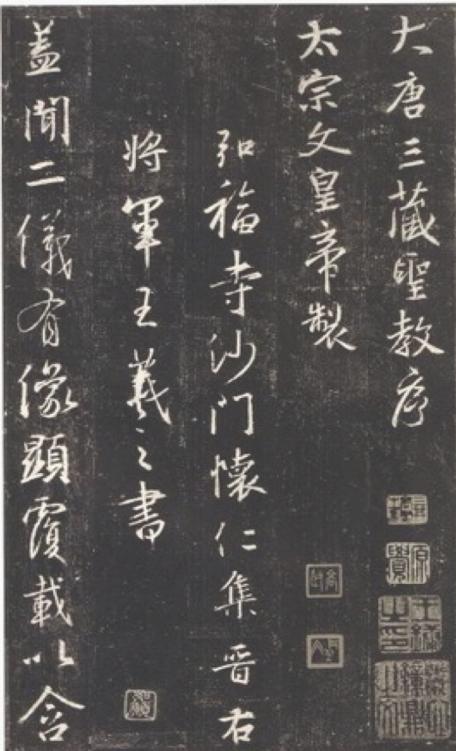
(672)

「集字聖教序」とも呼ぶ。弘福寺の僧の懷仁が王羲之の書を集めて作った碑。

648年から672年

「蘭亭序」とともに王法の行書の基本とされている。

「集字聖教序」とも呼ぶ。弘福寺の僧の懷仁が王羲之の書を集めて作った碑。までの25年間ほどかかって集字した。唐の太宗の序と高宗の序記に玄奘訳の般若心経を加えて、全文1904字。西安碑林藏。



学習のポイント

線と形の観察。力のバランス。遅速緩急のリズム。リズムの変化。起筆、送筆・収筆部の観察。一字の中曲直の変化。

「八面露鋒」の筆づかい。章法はあまり参考にはならない。

興福寺断碑 (721頃) 興福寺の僧大雅が王羲之の書を集めて作った碑。上半分を失つて700余字が残つていても不明である。字大約縦2cm横1.5cm。西安碑林藏。

封 司 地 之 班 金 冊 西

荷 使 命 將 軍 之 秩 雜

師 中 尉 指 南 宮 之

葉 其 或 瞳 剥 如 鐵 桉
際 明 霜 酣 虞 獬 狗 之 神



整本

※興福寺は唐の太宗が母の菩提を弔うために建てたもので、もと弘福寺といった。705年中宗即位の年に改称された。玄奘が訳経に3年間従事した寺である。集字聖教序ももとはこの寺にあった。

そくてんぶこう 則天武后（武則天）

624
?
—
705
年

は謚号。則天武后は高宗の皇后としての呼び方。

武則天は皇帝としての呼び方。14歳で太宗の後宮に入る。地位は「才人」。皇后のときから垂簾政治をした。中国史上唯一の女帝である。武周朝（在位690—705）を建てた。宫廷隨一と言われた頭脳の持ち主だが、冷酷無比で嫉妬深く「中国三代悪女」の一人であり多くの伝説がある。高宗の息子、異母子も含めて8人の息子のうち5人までが母親によつて殺されている。残る3人のうち1人は夭折、2人は12年以上監禁された。息子哲の妻、その他3人の嫁が殺され、2人の異母兄、甥、孫が殺害され、甥の孫、甥の妻、伯母も殺害された。在位30年間に太宗、高宗の兄弟一族70余人、宰相、大臣級の高官36人を皆殺しにした（旧幕臣を肅清した）。しかし、晩年の10年間は殺戮をやめ、優れた人物を重用し、国家をゆるぎなく統治し、仏教を基礎とした大帝國を建設しようとした。武后は個人的な才覚だけでのしあがつた人物であり、手足になつてくれる優秀忠実な官僚を見つけるため科挙の試験を全国に広げた。

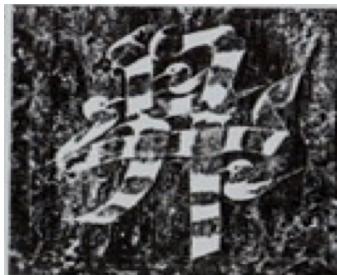
則天武后は、文字には魔力や呪力があることを強く信じていた。年号を16回も変えたり、役所名も変えていた。新しく文字も作った。それらは則天文字（そくてんもじ）（則天新字、武后新字ともよぶ）と呼ばれ17字ほどが知られている。

昇仙太子碑（しょうせんたいしひ）（699）撰文、書は武則天。碑文の33行の行書体は武則天、首行と末行の楷書体は薛稷の筆。

最初で女性の碑としても最初である。則天文字を使用している。碑は河南省偃師市^{かなんじょうえいし}の仙君廟^{せんくんびょう}に現存。



分



篆額部分の飛白体の昇

孫過庭

(648頃-703頃) 生涯についてははつきりしない。字は虔礼。

富陽(浙江省)の人らしい。高宗と武

則天の時代の下級官吏から率府錄事參軍になつたらしいが、讒言を受け退き、

貧困と病苦のなか洛陽の宿屋で病没したらしい。

書は二王を学び草書を得意とした。当時、初唐の三大家が世を去り、王羲之書法ではない新書風が台頭していくが、孫過庭は王羲之書法の典型を守る急先鋒であつたらしい。代表作は「書譜」「草書千字文」

書譜 (687頃) 孫過庭の書いた書論である。王羲之の正統を継ぐ草書の手本として、王羲之の「十七帖」と並び称される草書の代表的古典。駢儻文で書論の草稿が書かれている。高さ約27cm長さ約9mの紙に全文369行3727字(左右44cmの料紙23枚を用いている)。卷子仕立ての真跡が台北故宮博物院に所蔵されている。

内容は6章より構成されている。

第1章 張芝・鍾繇・王羲之・王獻之の優劣論 (四賢)

第2章 書の本質と価値

第3章 六朝以来の書論

第4章 執使用転の説と王書の価値

第5章 書表現の基盤と段階

第6章 書の妙境と俗眼への批判

跋語 「書譜」を書いた意図、目的について

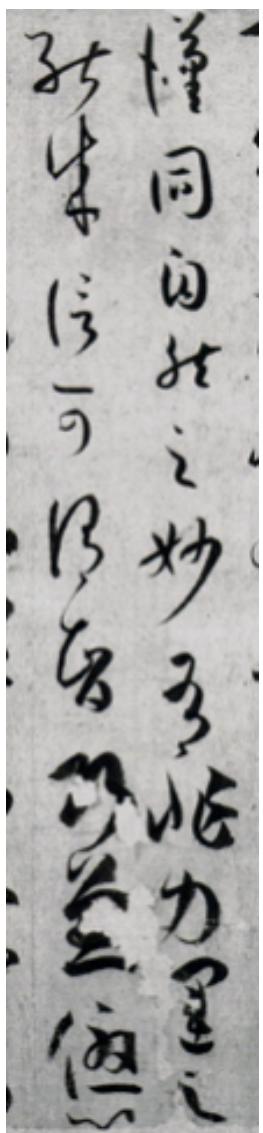
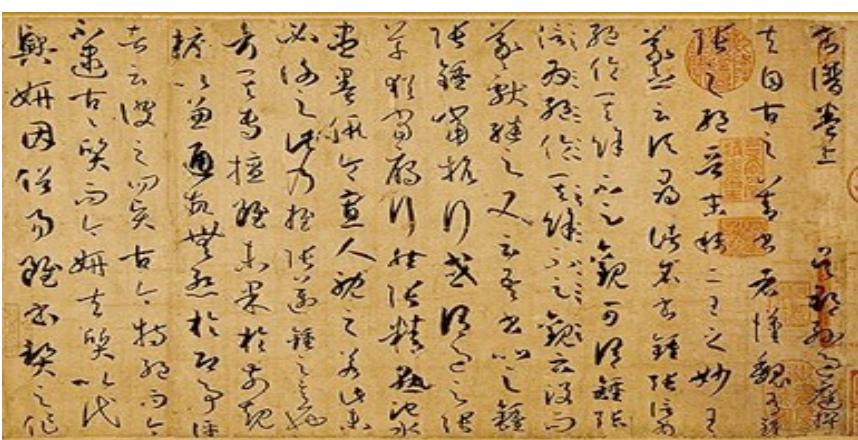
第1章 四賢の中で王羲之が最高であることを論じている。

第2章より

「同自然之妙有非力運之能成」

自然の妙有に同じく力運の能く成すに非ず

このような変化の妙を極めるのは自然を主宰する造化と一体になつた名人においてのみできることであつて努力して習熟すれば誰にでも出来るというものではない。



「天工人其代之」

天工人其れ之に代わる

天地自然の現象はすべて天工である。それを人が代わって行う。そこに芸の本質がある。

※『書經』より『書經』は『尚書』ともいい、中国最古の歴史書である。古くは『書』といつた。

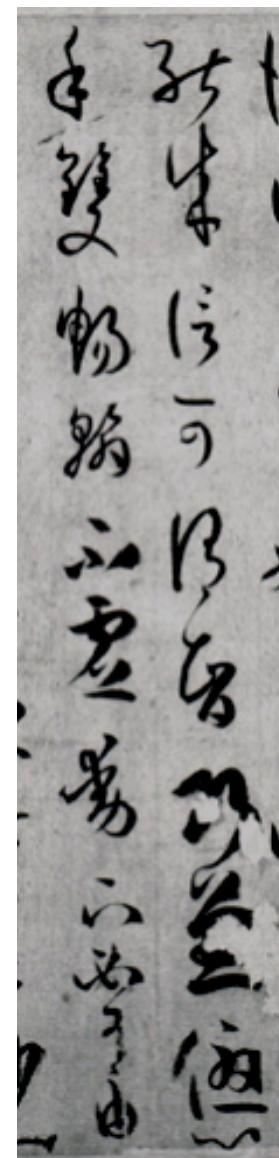
「心手雙暢」

心手双ながら暢ぶ

心は芸術的な感興。手は運筆の技法。この二つが共に暢達する」と。

暢達するとは、己の技巧をたのまぬことであり、力みのないことである。老莊思想の「わうとう無為自然」こと。

※ 当時書を学ぶことは男子の生涯を賭けるに足りない小道末技と考える思想が支配的であったのか、孫過庭はそれを否定して書道を最高の芸術とする。



一念にうちる事より多く思ひ煩
悉く圓滿兩ふうともゆゑ
ては神情物事一いふや或
直道ひこじうゆつめか事は
ミシカ也つ事あひる四じうや傳
れきをすくうゆつまく傳
る一念にうちる事より多く思ひ煩
風情日矣ニシキ也多事ふ
殊四象や情立多くまくさ
や未だ一際候方立多く



書ふ西風も情あふ
さへし風騒えもひか
は情も手て地えんそく

「豈知情動形言 取会風騷之意 陽舒陰惨 本乎天地之心」

豈に、情動けば言に形われ、風騷の意に取会し、陽に舒び陰に惨むは、天地の心に本づくを知らんや。

情が内に動いてそれが言語に現れ、陽（春夏の季節のこと）には気持ちがはらばれとし、陰（秋冬のこと）には気持ちが陰惨になるという『易』の思想の「天地の心」に基づくものであつて、人間の意志によって情が動くのではないことなど、理解出来ようか。

※ 文の内容の違いに相応して書の表現が変わるところに王羲之の書の藝術としての表現がある。王羲之は自然な情を大切にしたが、それは六朝時代の特質でもあつた。

※ 「風騷」とは詩の意。

※ 「舒」とはかたまたものを緩やかにして伸ばすこと。

書ふ西風も情あふ
さへし風騷えもひか
は情も手て地えんそく

「既失其情理乖其実原夫所致 安有體哉」

既に其の情を失へば、理はその実に乖く。夫の致とする所を原ぬれば、安んぞ体有らんや。

そういう実情を見失つてしまふと、その理解は王羲之の書の実体からは、かけ離れてしまふ。王羲之の到達した究極の境地をたどつてゆけば、どうして固定した型などがあろうか。そんなものはない。

※ 王羲之の書は、心の変化が表現の変化となつて現われ、心と同じように無限に変化してゆく。決まった型などはないのだといふこと。

※ 「情」「実」とは実情の意。

「執謂深淺長短之類是也。使謂縱橫牽掣之類是也。轉謂鉤環盤紝之類是也。用謂點畫向背之類是也。」

執とは深く持つか浅く持つか（指法）、持つ位置の筆毛からの距離が長いか短いか等の執筆法を言う。使とは縦横の直線の筆使いのこと。牽いたり掣えたりする相反する力の用い方のことか。

轉とは由緯の用筆法で草書の法のことか
※「釧」にかき「鉤」に鉤の轉「盤」に由かいくれる意
用とは点画の構成の仕方、結構法のこと。※「牽」は前方へ引くこと。「掣」は引きもどす意。

執とは筆圧の深浅の变化のこと。運筆のアクセントや呼吸のリズムのこと。使とは相反する力の用の方。転とは曲線の用筆法。用とは点画の関係用筆法のこと。

其の数法を会して、
一途に帰す。

「会其数法、帰于一途」
其の数法を会して、一途に帰す。
この四つの法を統一した一つの世界を会得する」と

第5章より 書の学び方について

其後復有之

「無不心悟手從、言忘意得」

ここりさと
てしたが
心悟り手従い、
言忘れ意得ざる無し。

莊子の「言葉によつて理解したもの」を習熟することによつて体得する、体得した時は言葉は忘れてしまう」という境地のこと。

「未於胸襟、自於玄心徘徊、一失
之重復、常獨滌淨、此復猶逸神、若
一得之、羊之心、秋毫也、望際庖丁」

「意先筆後、瀟灑流落、翰逸神飛、亦猶弘羊之心預平無際、庖丁之目不見全牛」

意は先に筆は後に瀟灑流落して、翰逸し神飛ぶこと、
亦猶ほ弘羊の心無際に預り、庖丁の目全牛を見ざりしがご」とし。

意が先に動いてその後から筆がついて行く。何のわだかまわりもなく、筆ははしり、心は飛翔して至妙の境地を行くであろう。それはちょうど弘羊が未来の経済を予見したように、庖丁が牛の肉を巧に解体したように、無心でいて、法にかなうようになるのである。(『莊子』養生主篇・庖丁の話より)

※「瀟灑」とは、何物にもこだわらないこと。観念に妨げられないこと。

※「流落」とは、さらりとして屈託のないこと。

※「翰逸神飛」とは、筆はのびのびとして、心は飛翔し、無法の境を行くこと。

「通會之際、人書俱老」

通會の際は人書俱に老ゆ。 本当にわかつた時は、人も書も老境に入る。

人も書も老いて美しくなる意。東洋では老を尊ぶ。円熟の境地のこと。

※「通會」とは「三時三変」を体験して始めて書というものが本当に解つてくることをいう。「三時三変」とは書道習得の過程における平正・険絶・平正のこと。険絶とは、奇異奔放の意。

「末年多妙」

末年妙多し 王羲之の作品もそうだが、晩年の作に妙品の多いこと。それは人格形成によると考えられている。しかし王羲之は59歳で没している。

心閑手敏

心は閑にして手は敏

心は閑りとして、手は鋭敏に動く

第6章より

「**假令、運用未周、尚虧工手秘奥、而波瀾之際、已（さんすいに齋）發於靈台**」

假令運用未だ周ねからず、尚工を秘奥に虧くも、而も波瀾の際は、已にふかく靈台より發す。

たとえ、運筆は未熟であり、技巧は奥義に達していないとも、筆鋒の躍動は、深く心の奥底から發現するものである。※「波瀾」とは筆の躍動のこと。「靈台」とは心のこと。

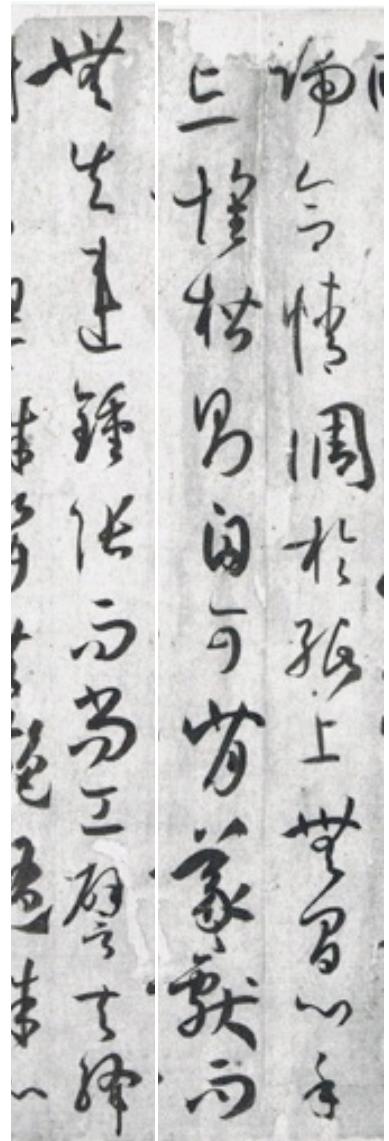
麦林靈臺必模仿通點
畠之情情究妙取之則能
鵝鳥篆陶均筆繫能
林之运用様承之極能
音之色如感之氣能方主篆

「必能傍通点画之情、博究始終之理、鎔鑄虫篆、陶均草隸、体五材之並用、儀形不極、象八音之迭起

感会無方」

必能く傍く点画の情に通じ、博く始終の理を極め、虫篆を鎔鑄し、草隸を陶均し、五材の並び用うるを体して、儀形極まらず、八音の迭も起ることに象りて、感会方無からん。

(とは言え) 書を学ぶ者は必ず博く点画構成の事情に通じ、運筆の理法を極め、虫書や篆書の如き古体文字、草書や隸書(楷書)のような現代通行の書体を十分にこなし、見事に造形し得て、大自然が五行を併せ用いることによつて、各種の現象を無限に造るが如く、また、八音が調和して一大合奏となり、無限の感興をよぶが如くありたいものである。(各書体の筆意がこもこも起ることで、それが調和するといふことである)



「無閒心手、忘懷楷則、自可背羲獻而無失、違鍾張而尚工」

心手を間つる無く、懷いを楷則に忘るるが若きに至りては、自ら羲獻に背けども失無く、鍾張に違へども尚ほ工みなるべし。

「書法における無法の境」

心のままに手が動く、「心手相応」の習熟した境地に達して、書法を忘れてしまうという高く深い無心の芸境に到達すれば、おのずから「王にそむいても欠点とはならず、鍾繇・張芝の書法と違つてゐるとしても、やはり巧みであると言えるであろう。

※書法は書作の手段としては必要だが、目的を果たしてしまえば無用である。筆が自由に使えるまでは四賢の書を法としなければならないが、筆が自由に使えるようになつたら、書法などはいらないのである。

技法

直筆と側筆

書譜によつて草書体の基本的なくずし方を学ぼう。

均衡（力のバランス） 中心軸に對して左右の力のバランス。

字の幅の、左右の振幅の変化。

上大下小（一字の中と行）

草は走るが如し（前のめりの構え）

前後の関係を見る。

「八面露鋒」の筆使い。

草書は一定の形を持たない自由な書体である。

その他